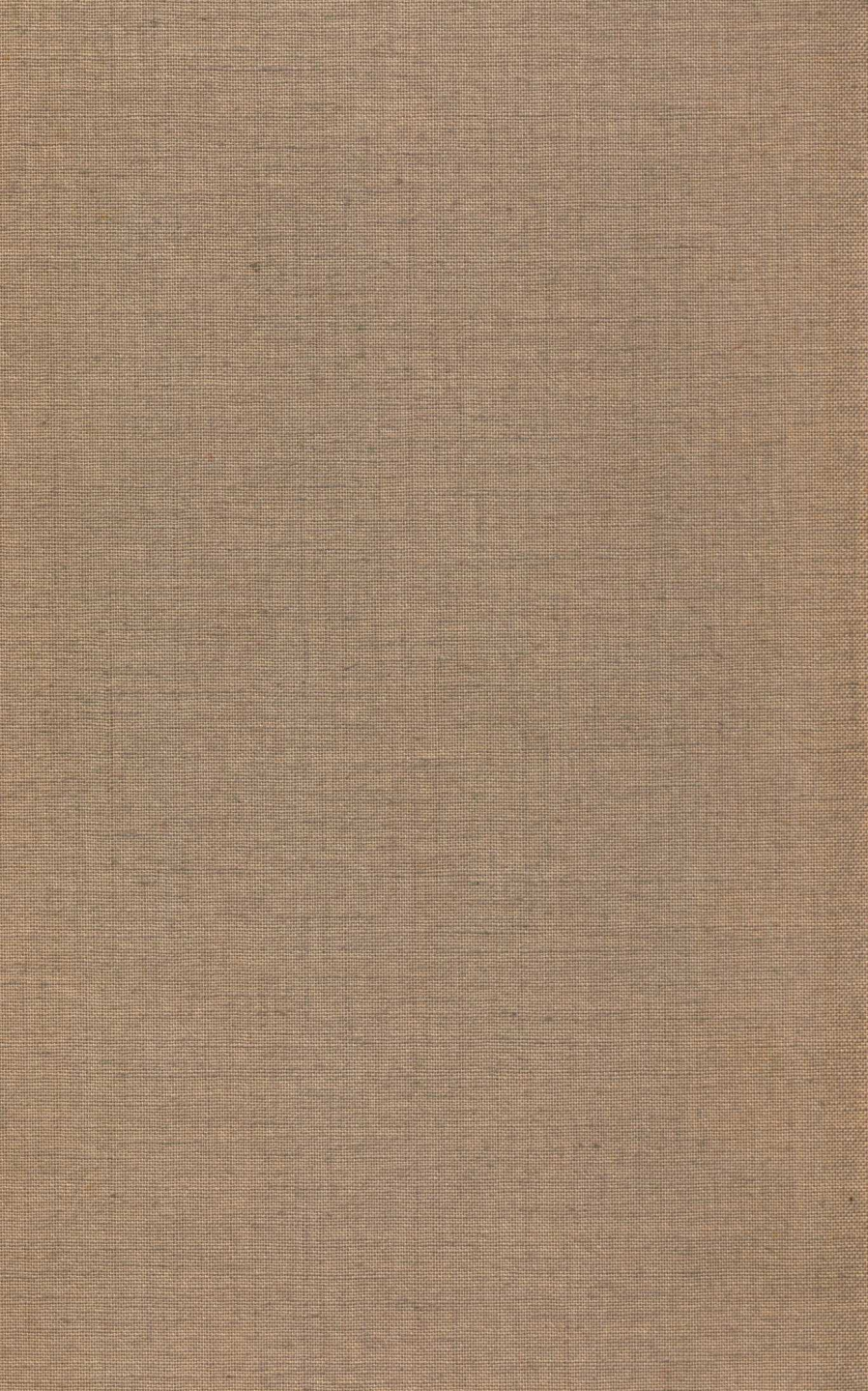




遠藤周作文学全集 4 新潮社版

法師歌



哀歌・影法師  
あいかかげぼうし

遠藤周作文学全集第四卷

定価 一五〇〇円

印刷 昭和五十年八月十五日  
発行 昭和五十年八月二十日

著者 遠藤周作（えんどうしゅうさく）

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社

株式会社

〒162 東京都新宿区矢来町七一  
電話 業務部 03（二六六）五一一一  
編集部 03（二六六）五四一一  
振替 東京四一八〇八

印刷所 三晃印刷株式会社  
製本所 新宿加藤製本株式会社

© Shinsaku Endo, 1975, Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

## 目次

|        |     |
|--------|-----|
| 男と九官鳥  | 5   |
| その前日   | 35  |
| 四十歳の男  | 51  |
| 大部屋    | 79  |
| 童話     | 101 |
| 雑木林の病棟 | 121 |
| 帰郷     | 141 |
| 札の辻    | 165 |
| 雲仙     | 185 |

|                |     |
|----------------|-----|
| 私 の も の        | 203 |
| 例之<br>酒癖 一 盃綺言 | 223 |
| *              |     |
| 扮装する男          | 241 |
| も し ……         | 257 |
| 影 法 師          | 273 |
| 六日間の旅行         | 307 |
| なまぬるい春の黄昏      | 325 |
| 解題             | 359 |

遠藤周作文学全集

第四卷

小説 4



男と九官鳥





I

「暗いところですなあ。それにここには四つしか病室がないのですか。寂しいですなあ」

廊下で若い男の声がします。

「おや、いけませんでしたか。私たちはね、ここが静かでベランダもありますから、お奨めしたのですよ。おイヤなら、特別病棟ということになりますけど、よござんすか。あそこは保険はききませんよ」

嫌味たっぷりな声で答えているのは、ぼくら患者の仇敵きあうてきともいうべき堀口主任看護婦です。色が黒く、背が低く、獅子ししっ鼻で、三十二歳になっても嫁にも行けぬのはナイチンゲール精神に燃えたためではなく、一度も男から見向きもされなかったからでしょう。それだけに狭量で、意地悪で、規則の権化のような顔をして、我々かよわい患者を苛める女です。

「保険なしなんて。冗談じゃありませんな。われわれとしては親爺おやじを入院させるだけで精一杯なんですから……」

「ではここに御入院になりますね。変更は絶対になさいませんね」

主任は冷たく突放しました。

「とに角、明日にでも入院したい患者が、そりゃあ沢山いるんですからね。あとになって変えられると……」

「はあ、はあ」

二人の登音<sup>あしおと</sup>が廊下のむこうに消えたのは、ちょうど安静時間の終った時でした。松田さんの部屋からも服部君の病室からも咳<sup>せき</sup>の音、あくびの音がひとしきり聞え、それから二人は各病室をつなぐベランダ（とあの主任は言いましたが、なかに、本当はきかない物干台のことです）に出て背伸びをはじめました。

「熊谷さん、熊谷さん。三号室にだれか入るようですね」

さきほどの会話を聞いていたのか、服部君が私に声をかけてきました。

「どうやら、そうらしいね」

はだけた寝巻からマツチ棒のようにつき出たくらい脚をさすりさすり私は返事をしました。肺を半分に肋骨<sup>ちゅうこつ</sup>を六本も切るといふ大手術を受けて四カ月もたっていないため、この足からも尻からも肉が情けないほど落ちてしまいました。

「こんどの新入りが若い娘だといいなあ」

「そうはいかん。大体は若い、……女って奴はケチだからねえ。死にそうでもなければ入院せよ」

服部君が若い女性患者を待望しているのは必ずしも彼が女好きなためだけではありません。ロカビリイきちがいのこの学生はたしかに女好きですが、一カ月や二カ月の短期患者とちがって少なくとも半年の入院を命ぜられる我々には毎日、毎日が涙のほど退屈なのです。やさしく人

から扱われることと、なにか新鮮なことに飢えているのです。

つい、この間までこの三号室には中年の女の人が入院していました。質素で目だたぬ人でしたから私たち患者は田舎のおばさんぐらいに思っていたのですが、やがてこの人は近く歌舞伎界で有名な名をつぐ俳優の奥さんだと知って仰天したものです。夫の華やかな襲名披露が行われる直前、彼女は退院しました。

「しかし、なんや。あの堀口の答えかたは。まるで喧嘩<sup>けんか</sup>ごしや」

今まで黙っていた松田さんがペランダで急に口を出しました。松田さんは大阪のある会社の課長さんですが、この課長さんというのをいささか鼻にかけるようです。私たち三人のなかで一番、堀口主任に睨<sup>にら</sup>まれているのは禁じられた煙草を平気で喫って以来のことですが、松田さんの方でも自分を課長として扱わないあの獅子<sup>しし</sup>っ鼻の女を憎悪<sup>ぞうお</sup>することによって毎日の退屈をまぎらわせていました。

「人情いうもののヒトカケラもあの女は持つとらんで。岸首相みたいな奴や」

「自分が非常に偉い、そう思いこんでるんですね。何時<sup>いつ</sup>も患者に命令しているうちに自分を偉い、偉いと考えてしまったんですよ」

けしかけるように服部君が言いますと、

「へえ。何処<sup>どこ</sup>が偉いんや。おかしゅうなるわ。病院やからこそ威張<sup>おご</sup>っとるが娑婆<sup>しやば</sup>に出れば、あんなもん」松田さんは口惜<sup>くき</sup>しがりました。「ただのブタ女やないか」

「そうです。誰だっけ見向きもせんブタですよ。ブタ、お、ん、な」

毎日、その日の日課のように私たちは堀口主任看護婦のすべてをスミズミまでほじくり出し、欠点を並べたてます。それは一つには退屈しのぎでもありました。午後のながい時間のあいだ六

時の検温とまずい夕食までに他に何をするところがあるのでしょうか。

しかし今日は一寸ちがうのです。新入患者が三号室にくるのがきまったのです。どんな人間か。どんな職業か。そして特に病状はどうかと言う点が私たち古顔の好奇心をいささかそそります。新顔の病状が自分より良いとかすかな憎しみをそいつに抱き、彼の病状が悪ければ妙な優越感をもののが私たち患者の心理です。

翌日は雨でした。けむりのような雨が夜から降り続き、中庭の痩せた樹木や雑草の根の底まで濡らして、雨の庭に何所から迷いこんだのか二匹の白い野良猫が歩いています。廊下は何時もよりも暗く寒い。その暗く寒い廊下に布団づつみやトランクを載せた運搬車がきしんだ音をたててやってきました。ふちなし眼鏡をかけたなかなかハンサムな男がその車のそばにつき添っています。

「あいつか。いや、あいつやないで。あいつの親爺らしいぞ。どんなオッさんか服部君、ちょっと見てこいや」

「またぼくか。やだなあ。松田さん、なんでもぼくにさせるんだから」

「おい、今のうち言うこと聞いとけば、退院してから俺の会社に入れたるで。これでも俺は課長さんやから……はあ」

服部君は手ににぎった花札を皺くちやのシートの上において病室を出ていきました。やがて彼の報告によると顔の蒼ぐろい、ひんがら眼でぶしょう髭のはえた老人が手押車にのせられて、たった今、三号室に入ったそうでした。そしてあのハンサムな青年は患者の息子らしいが荷物をおくとすぐ帰ったということです。

「ひんがら眼の爺さん、一人ぼっちでとり残されて膝に鳥籠かかえてましたぜ」

「鳥籠？ けったいなオッさんやな。どんな鳥や」

「カラスみたいに真黒で、嘴と胸のところが黄色いんです。熊谷さん。あれカラスですか」

「そりゃ、九官鳥だろ」

「ほう、九官鳥か。ますますけったいなオッさんやな」

雨が窓を叩く細かな細かな音が夕暮まで続きました。新入りの病室もひっそりと静まりかえり、やがて一きれの煮ざかなとつめたいケンチン汁と沢庵をのせた夕食の盆を看護婦が配膳してまわります。暗い灯の下で箸を動かしていると、

「熊谷さん、九官鳥の部屋に行ってみませんか。例によって御挨拶をやりましょう」

爪楊枝を使いながら、また服部君が顔をだしました。いや、まったく時間の使い方がないのです。新しい患者がくると、私たちのような病院ずれをした連中は、御挨拶と称してその病室に押しかけ彼等にこれから受けねばならぬ気管支鏡や気管支造影の検査がいかに苦しく、いかに辛いかをのべたてて楽しむのであります。

私たちは面白がって老人の病室まで行きました。まだ七時だというのに灯は消えています。耳をすましても部屋からはかすかな響きもせず、こまかい雨の音のほうのはっきり聞えるだけでした。

## Ⅱ

けれども私たちだってあの老人が九官鳥の持主でなければ、これほど好奇心を起さなかったかもしれません。しかし一日をもて余している私たちには、モノを言う九官鳥は恰好の退屈しのぎ

になるのです。

老人のことは翌日になると、もつとニュースが集まりました。名前は中川嘉三、渋谷のかなり大きな靴屋の主人ですが、息子夫婦がその長患いに閉口して、病院に送りこんだのだそうです。

「なかなか当世風の息子夫婦らしいです」松田さんは菊地とよぶ若い看護婦からえた情報を伝えました。「病室に病人おくと自分はさっさと引きあげよったんやがね。特に若い嫁さんのほうは伝染をこわがって、看護婦室で待つとったそうや」

しかし、姥捨山うばすてやまの話に似たこういう出来事は病院ではあまり珍しくありません。厄介払いの意味で病院に送られる肺病や中風の老人は意外に多いのです。家族はほとんど見舞いに来ず、たまに訪れても医者や看護婦にあまり高価な薬を使ってくれるな、と頼む連中もいるそうです。

私は窓から首をだして、まだうす暗い外を見ました。九官鳥の鳥籠は病室に入れてあるのか、裸のペランダは霧雨に細かく濡れていました。

「九官鳥のことですがね。菊地さんが今朝体温をとりに行く」と今度は服部君が引きとって、

「それに気づかぬ爺さんは九官鳥にむかって、しきりに息子たちの悪口をのべていたそうですよ」

「へえ、悪口をねえ」

家族から見はなされた老人が寝巻の前をはだけ、床にしゃがんで一日中、鳥籠の九官鳥に息子夫婦の悪口をふきこんでいる陰気な姿が私の眼にうかびました。

「そりゃ、滑稽やなあ。おもしろいやないか。俺もその鳥かりて、堀口主任の悪口を言うよう、しこんでみたるか」

松田さんは禁じられた煙草をふかしながら、すっかりこの思いつきに夢中になりました。堀口

主任が病室に来る。すると松田さんによって訓練された九官鳥は即座に黄色い嘴をひらいて叫ぶのであります。「堀口のフタ。フタの堀口、フタ女」

昨日からの雨はまだ小やみなく続いています。二匹の白い野良猫は中庭の樹の下で、じっと空を見あげています。

その雨がやると止んだ夕暮、今度は思いがけなくも我々の無聊を慰めてくれる事件が持ちあがりました。

我々が最初、耳にしたのは三号室のあいた扉から洩れる堀口主任のきつい声で、

「中川さん、あんた。何か間違えているんじゃないやありません？ 病院は病気をなおす場所、鳥のお世話をする鳥屋じゃ、ございませんですよ。ただでさえ手不足なのに、鳥の世話までできるもんですか」

それから病人のひくい、嘎れた声がなにかを抗弁しているようでしたが、これは聞きとれませんでした。しかし堀口主任看護婦はこの抗弁に耳もかかず、出来るだけ早く九官鳥を処分してもらいたいと一方的に宣言して運動靴をならしながら引きあげたようです。

「なんや、なんや、なんや。そんな馬鹿なこと、あるもんか」

主任の登音が消えると、松田さんは急に怒鳴りだしました。松田さんだけではなく、服部君も怒鳴り、なにからなにまでキソクをふりまわし、やれ電熱器の使用はいけません、やれ見舞い客と飲食してはならないと小言ばかり並べたてるフタ女には、もう我慢ならぬと叫んだのです。息子夫婦にも見離された爺さまの、たった一人の仲間である九官鳥までとりあげるとは少し非人情な仕打ちです。フタ女にたいする平生の不満は、今、老人にたいする同情と変っていきました。

「ここはアウシュヴィッツの収容所でしょうか」



「囚人やない。客だ。こちとらは入院費払うたお客やないか」

しかし収容所の捕虜と同じように病院に入る者は洋服をぬがされ、寝巻かジャマに着かえさせられます。社会的服装も装飾もすべて捨てさせられ、そして彼が世間で課長さんであろうが、若旦那であろうが、医者や看護婦の眼にはもはや一人の患者としてしかうつらないのです、これが……松田さんにも服部君にも私にも、とても口惜しいのでした。

私といえば、声こそあげませんでした、矢張り堀口主任の仕打ちには腹をたてていました。中川さんにたいする同情も勿論ありますが、それよりも我々の退屈を今後まぎらわしてくれるべき一羽の鳥まで飼わせない、そのキソクずくめが欄に障るのです。

「俺あ、主任にかけあうぞ」

「やりましょう。松田さん、熊谷さん。これは虐げられたものの戦いです」

ロカビリイ好きな学生は何時の間にか勇ましい革命家に変わりました。

「待て、待て」

比較的、冷静な私は二人を遮って、「その前に本人の意向を聞かなくちゃ。とに角、あの九官鳥の持主はお爺さんだから」

三人は廊下に出て三号室の扉を叩きました。扉の内側で痰のからんだ返事がきこえました。花も花瓶もないさむざむとした部屋でした。暗い電気の中で中川老人は寝台の上にチャンチャンコを着た上半身を起し、ひんがら眼で、こちらをじっと眺めています。服部君が言ったように顔色の蒼黒い不精髭をはやした年寄りでした。そして床の上には白いほこりがついた浅瓶が一つ、セロイドの洗面器が一つ、それに問題の鳥籠がありました。鳥籠の影が壁に大きな影をつくり、九官鳥は我々の物音に驚いてバタバタと羽ばたくと、その影も動きました。松田さんが見舞いの